

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02762

研究課題名(和文)大規模ナラティブコーパスによる日本人英語学習者の「話す力」「書く力」の実証研究

研究課題名(英文)An empirical study of speaking and writing by Japanese learners of English based on a large-scale narrative corpus

研究代表者

山口 有実子 (Yamaguchi, Yumiko)

東海大学・国際教育センター・准教授

研究者番号：10624041

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本人英語学習者の「話す力」と「書く力」の解明を目的とし、文字のない絵本を用いた口頭と筆記のナラティブを収集して話し言葉と書き言葉の学習者コーパスを構築し、代表的な第二言語習得理論の一つである処理可能性理論およびヨーロッパ言語共通参照枠を基に文法と語彙の使用を分析した。文法使用については、処理可能性理論が予測する普遍的発達段階を概ね支持する結果が得られたが、ヨーロッパ言語共通参照枠に基づく語彙使用との関連については更なる調査が必要である。

研究成果の概要(英文)：This project investigated Japanese learners' speaking and writing in English by constructing a learner corpus of spoken and written narratives using a wordless picture book and analyzing the use of English grammar and vocabulary based on one of the second language acquisition theories, namely Processability Theory (PT) (Pienemann, 1998, 2005; Pienemann, Di Biase, & Kawaguchi, 2005; Bettoni & Di Biase, 2015), and the Common European Framework of Reference for Languages (CEFR). While the results demonstrated general support for the developmental stages of English grammar predicted in PT, more research is needed to explore the relationship between the PT stages and the CEFR levels.

研究分野：外国語教育、第二言語習得

キーワード：外国語教育 第二言語習得 コーパス言語学 処理可能性理論

1. 研究開始当初の背景

(1) 学習者の話し言葉や書き言葉を収集した「学習者コーパス」は、英語教育や学習辞書の編纂に活用されてきているが、第二言語習得分野への応用は少ない。

(2) 公開されている学習者コーパスはエッセイ等によって構築された書き言葉が中心であるため、話し言葉は少なく、特に、同一学習者による話し言葉と書き言葉を収集したコーパスは稀である。

(3) 第二言語習得研究分野においては、一人の学習者を長期的に観察するケース・スタディや小規模な実験データによる研究が主流であり、大規模コーパスによる仮説の検証はまだ進んでいない。

(4) 代表的な第二言語習得理論である処理可能性理論 (Processability Theory, Pienemann, 1998; Pienemann, Di Biase, & Kawaguchi, 2005; Bettoni & Di Biase, 2015) で予測される普遍的発達段階については、話し言葉による検証が中心であり、書き言葉における発達段階との比較はほとんど行われていない。

(5) 処理可能性理論による文法発達段階と学習者の語彙使用の関連についての研究はまだ少ない。

(6) 英語教育現場で普及しているヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) についての実証データは少なく、処理可能性理論が予測する普遍的発達段階との関連性についても明らかにされていない。

(7) 国内でのみ英語を学習している日本人学習者と海外経験のある日本人学習者における話し言葉と書き言葉において、第二言語習得理論を用いて、実証的に比較した研究は少ない。

2. 研究の目的

(1) 日本人英語学習者の話し言葉と書き言葉の学習者コーパス、特に、同一学習者による同一題材を用いた口頭と筆記の学習者コーパスを構築する。

(2) 代表的な第二言語習得理論である処理可能性理論 (Processability Theory, Pienemann, 1998; Pienemann, Di Biase, & Kawaguchi, 2005; Bettoni & Di Biase, 2015) で予測される普遍的発達段階について、大規模学習者コーパスによる検証を行う。

(3) ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) を用いて、日本人英語学習者の語彙使用を分析す

る。

(4) 日本人英語学習者の話し言葉、書き言葉において、文法使用、語彙使用にどのような違いが見られるかを分析する。

(5) 処理可能性理論を用いた分析で示された文法発達段階と CEFR レベルを用いた語彙使用について比較する。

(5) 国内でのみ英語を学習してきた日本人英語学習者、海外で英語を長期的に使用した経験のある日本人学習者、同年代の英語母語話者の文法、語彙使用を比較する。

(6) 国内で学ぶ日本人学習者のスピーキング・ライティング指導において強化すべき点を解明する。

3. 研究の方法

(1) データ収集

参加者: 日本人英語学習者 497 人 (18-30 才、平均 19.40 才、SD = 1.274)、英語母語話者 11 人 (19-26 才、平均 21.27 才、SD = 1.902) による文字のない絵本を題材とした口頭と筆記のナラティブデータの収集。

① アンケート調査 (英語学習歴、海外経験、英語検定試験スコア等)

② 文字のない絵本 ("Frog, where are you?" Mayer, 1969) の 24 場面を見せて、辞書などを使用せずに口頭と筆記にて物語文を作成させる。(口頭ナラティブを IC レコーダーに録音、筆記ナラティブは用紙にペンで記入)

(2) コーパス構築

① 口頭ナラティブの文字化を業者に依頼。

② 文字化された口頭ナラティブ及び筆記ナラティブをコンピュータに入力

③ アンケート調査で得た情報を参加者の属性としてコーパスに加えて、参加者ごとに口頭と筆記を別々にしてテキストファイルを作成。

④ 処理可能性理論に基づく文法項目についての正用・誤用のコード付け。

(3) データ分析

① コーパス分析ソフトウェア (WordSmith Tools) による token, type, type/token ratio, wordlist, 文法構造の産出頻度などの分析。

② 処理可能性理論を基に文法項目の産出と使用の正確さを分析。

③ ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) による語彙使用の分析。

④ 各参加者の話し言葉、書き言葉について、処理可能性理論による文法発達段階、語彙使用における CEFR レベルにどのような違いが見られるかを分析。

⑤ 海外で英語を使用した経験の有無が文法や語彙の使用に影響しているかについても分析。

4. 研究成果

(1) 学習者コーパスを用いた処理可能性理論の検証1：日本人英語学習者 308 人の話し言葉及び書き言葉コーパス 616 ファイル（海外長期滞在経験なし 281 人、562 ファイル及び海外長期滞在経験あり 27 人、54 ファイル）について、処理可能性理論が予測する英語形態素の発達段階（語彙形態素 > 区内形態素）を検証し、以下の結果を得た。

① 複数を表す形態素の習得において、海外経験なしの学習者、海外経験ありの学習者の両方で、処理可能性理論が予測する発達段階を概ね支持する結果となった。

② 先行研究 (Charters, Dao, & Jansen, 2011) では、語彙形態素より数詞を伴う区内形態素の方が先に習得されるという結果も見られたが、本研究ではほとんど見られなかった。

③ 先行研究 (Tang & Zhang, 2015) では、筆記の発達段階のほうが高い学生が多いという結果が見られたが、本研究では筆記と口頭が同じ学生が最も多く、先行研究では見られなかった口頭のほうが高い学生もいた。

④ 海外経験の有無による口頭、筆記発達段階を比較すると、海外経験ありの学習者には筆記より口頭が高く、海外経験なしの学習者には口頭より筆記が高い傾向が見られた。

(2) 学習者コーパスを用いた処理可能性理論の検証2：日本人英語学習者 155 人の話し言葉及び書き言葉コーパス 310 ファイルについて、処理可能性理論が予測する英語統語発達段階（規範的マッピング > 非規範的マッピング）の検証及び CEFR レベルを用いた語彙使用の分析を行い、以下の結果を得た。

① 英語統語構造における規範的マッピング、非規範的マッピングの習得において、処理可能性理論が予測する発達段階を支持する結果となった。

② 構造的な非規範的マッピング（使役文、受け身文）について、口頭より筆記にて、より多くの使用が見られた。

③ 先行研究 (Kawaguchi, 2016) と同様に、構造的な非規範的マッピングの習得について、受け身文 > 使役文 の順に発達することが示された。

④ 語彙的な非規範的マッピング（心理動詞、非対格動詞）の習得について、口頭より筆記にて、より多くの使用が見られた。

⑤ 多くの学習者が多様な非対格動詞を使用した。正しいマッピングで使用された心理動詞は数回しか見られず、処理可能性理論における文法項目習得基準を満たす学習者はいなかった。

⑥ 先行研究 (Kawaguchi, 2016) と同様に、語彙的な非規範的マッピングの習得について、非対格動詞 > 心理動詞の順に発達することが示された。

⑦ 学習者 155 人中 34 人が口頭と筆記の両方で、構造的な非規範的マッピングを習得していることが示された。

⑧ 構造的な非規範的マッピングを習得している学習者は、習得していない学習者よりも、口頭と筆記の両方において、より多くの産出、より多様な語彙を使用し、より高い CEFR レベルの語彙使用の割合が多かった。

⑨ 学習者 155 人中 68 人が口頭と筆記の両方で、語彙的な非規範的マッピングを習得していることが示された。

⑩ 語彙的な非規範的マッピングを習得している学習者は、より多様な語彙を使用し、より高い CEFR レベルの語彙使用の割合が多かった。

⑪ 構造的な非規範的マッピングの習得と語彙的な非規範的マッピングの習得には高い相関が見られた。

⑫ 学習者 155 人中 33 人が口頭において構造的な非規範的マッピングと語彙的な非規範的マッピングの両方を習得しており、より多くの産出、より多様な語彙使用、より高い CEFR レベルの語彙使用の割合が見られた。

⑬ 学習者 155 人中 36 人が筆記において構造的な非規範的マッピングと語彙的な非規範的マッピングの両方を習得しており、より多くの産出、より多様な語彙使用、より高い

CEFR レベルの語彙使用の割合が見られた。

⑭ 非規範的マッピングの習得について、口頭と筆記において高い相関が見られた。

⑮ 学習者 155 人中 15 人が口頭、筆記の両方において、構造的な非規範的マッピングと語彙的な非規範的マッピングの両方を習得していると示された。

⑯ 英語母語話者に多く見られる CEFR レベル C1 に含まれる語彙使用が見られたのは、学習者 155 人中、口頭で 8 人、筆記で 6 人であり、CEFR レベル C2 に含まれる語彙使用が見られたのは、口頭で 7 人、筆記で 8 人であった。

⑰ 英語統語構造の習得において処理可能性理論で予測する高い発達段階にいと見なされた学習者が、必ずしも高い CEFR レベルの語彙を使用しているとは言えないことが示された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

① Yamaguchi, Y. & Usami, H. (2017b). Plural marking in spoken and written narratives: A corpus-based study of Japanese learners of English. *International Journal of Applied Linguistics & English Literature*, 6 (5), 224-231. <http://dx.doi.org/10.7575/aiac.ijalel.v.6n.5p.224> 査読有

② Yamaguchi, Y. & Usami, H. (2017a). Japanese learners' use of English grammar in speaking and writing: A Processability Approach. *Proceedings of Pacific Second Language Research Forum 2016*, 237-242. 査読無

③ 山口有実子 & 宇佐美裕子 (2016). 英語学習者の『話す力』『書く力』の実証研究～複数を表す形態素使用の分析. *東海大学国際教育センター所報第 36 輯*, 57-64. 査読無

[学会発表] (計 6 件)

① 山口有実子、学習者コーパスによる第二言語習得理論～Processability Theory～の検証 (招待講演)、第三回学習者コーパス・ワークショップー学習者コーパスから第二言語習得を考える、2017.12.3、国立国語研究所(東京)

② Yamaguchi, Y. & Usami, H., Acquisition of

English grammar and vocabulary by Japanese learners of English: A learner corpus study, The 17th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition (PALA 2017), 2017.9.5, Ludwigsburg University of Education (ドイツ)

③ Yamaguchi, Y. & Usami, H., A learner corpus study on the use of English grammar and vocabulary by Japanese university students, The 27th Annual Conference of the European Second Language Association (EUROSLA 2017), 2017.9.1, University of Reading (イギリス)

④ Yamaguchi, Y. & Usami, H. Japanese learners' use of English grammar in speaking and writing: A Processability Approach. Paper presented in Pacific Second Language Forum 2016 (PacSLRF 2016), 2016.9.10, 中央大学(東京)

⑤ Yamaguchi, Y. & Usami, H. Testing Processability Theory with a large-scale learner corpus: Plural marking in oral and written production by learners of English as a foreign language. The 16th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition (PALA 2016), 2016.9.7, 中央大学(東京)

⑥ 山口有実子 & 宇佐美裕子、日本人英語学習者ナラティブコーパスによる『話し言葉』『書き言葉』の研究、英語コーパス学会第 41 回大会、2015.10.4、愛知大学(名古屋)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

山口 有実子 (Yamaguchi, Yumiko)
東海大学・国際教育センター・准教授
研究者番号：10624041

(2)研究分担者

宇佐美 裕子 (Usami, Hiroko)
東海大学・国際教育センター・准教授
研究者番号：20734825

(4)研究協力者

川口 智美(Kawaguchi, Satomi)
西シドニー大学・
人文コミュニケーション芸術学部・
准教授

ディビアッセ ブルーノ (Di Biase,
Bruno)
西シドニー大学・
人文コミュニケーション芸術学部・
客員准教授